

風の末裔シリーズ・1stシーズンの2

～あなざあ・すとおりに～



イルアルティは草原をトボトボ歩いてた。涙と鼻水でグチャグチャな顔をして。

兄妹喧嘩はいつもの事だけれど、今日のお兄ちゃんはひどい。イルの事を捨て子賣い子って言うの。それは、イルの心にいつも棘みだいに刺さっていた事だった。

イルは六人兄弟の末妹だけど、一番近いお兄ちゃんは五つ年上で、そこから上はみんな年子だ。お兄ちゃん達はお父さんそっくり、お姉ちゃん達はお母さんそっくり。

でも、イルはどっちにも似ていない。目も、鼻も、口元も、お父さんお母さんのどことも重ならない上に、肌の色だって全然違う。

イルだってもう七つだ。子供っていうのは、お父さんお母さんの部品を買って生まれて来る事知知っている。どちらにも似てないってどういう事なのかも。

ずっと気にしていたのを、今日お兄ちゃんにいきなり言われて、心の堰が切れて、涙がポロポロ、ポロポロこぼれてしまった。

お兄ちゃんも他の兄弟達も、びっくりしたけれど、イルはそ

の先何か言われるのが怖くて、バオを飛び出して走って逃げた。イルの足は凄く早い。本気で走ったら一番上のお兄ちゃんだって追いつけない。兄弟の誰かが追い掛けてくれたかもしれないけれど、イルは誰とも話したくなかった。

「おうちに帰りたくない…」

丘の上の大きな榎の木の下に座り込んで、夕陽を眺める。

頭の上には早い星がきらめきだし、迫る夜の闇が泣きべそイールを覆い隠してくれるような気がした。

遠くの草原にちらちら見え隠れする物がある。風にうねる草原に溶け込むように、草で出来た馬が何頭か駆けている。

馬上には、色の薄い幻のようなヒトが乗っている。イルが物心ついた頃から何度も見かける光景だ。

それも、お兄ちゃんがイルを馬鹿にするネタのひとつだ。自分と他の兄弟の違いを感じだした頃から、イルはそれを口に出すのはやめた。

「おなかすいた…」

夕焼けは紫になって、頭上の星々は小さい子供に帰宅を促す。でもおうちに帰りたいくない…

あの草の馬達がさらって行ってくれないかしら。多少怖い所

に連れて行かれたって、みんなの気の毒そうな視線の集中する食卓よりはいい。お父さんはきつと言っ。お前ももう七つだ、本当の事を言っても受け止められるね……って。

七つだって、いくつになつたって聞きたくない！ イルは耳を押さえてうずくまつた。固く閉じた目から、涙がまた滲み出て来た。

「イルアルティ」

風が優しい声を運んで来た。顔を上げると……お父さん。イルが一番仲良しの馬に乗っている。

「こいつは、お前が何処に行つても、一直線に見つけるな」

馬はイルの涙でテカテカのほつべたに鼻をくつつけた。あつたかい……

お父さんがイルの横に腰を降ろした。イルはドキドキした。

「イルはもう七つか。お父さんの話を聞いてくれるかい？」

イルは耳を塞いでかぶりを振った。

「……………」

お父さんはイルの肩に手を回して抱き寄せた。

しばらくあつたかいお父さんの心臓の音を聞いていて、覚悟を決めた。顔を上げてお父さんを見つ直ぐに見る。

「イル、お祖父さん、お祖母さんは好きかい？」

拍子抜けな質問だ。

「うん、好き」

「お父さんも好きだ。たくさん兄弟を分け隔てなく大切にしてくれた。でもね、お祖父さんお祖母さんは、お父さんの本当の両親じゃないんだ」

「え……」

思いも寄らない告白だ。

「お父さんがね、イルくらいの時……」

お父さんは、話が早すぎて着いて来られないイルを、少し待ってから続けた。

「お父さんがね、イル位の時、この土地で戦争があつてね。怖い兵隊が来て、お父さんの両親も兄弟も、みんな殺されたんだ」

「……………」

そんな事初めて聞いた。ほんのちよつと前まで、世界一可哀想な気分でした自分を恥ずかしく思った。

「兵隊が見えた時、お父さんの両親が、お父さんと妹を馬に乗せて一番に逃がしてくれたんだ」

「だから、お父さんは生き延びられたのね」

「ああ、だけれど、それだけじゃない」

お父さんは風にうねる草原を見やった。

「その頃、お父さんと妹には素敵な友達がいたんだ」

お父さんの声が急に、少年のように生き生きとした。

「名前も知らない、喋った事もない、…ただ、お父さん達が野駆けをしていると、何処からともなく現れて、横を走っているんだ。こちらが笑うと向こうもニコツとする。それだけで、その子の事が大好きになれたんだ」

お父さんは夢見るような顔で過去に思いを馳せている。イルはドキドキしてそっと聞いた。

「その子は…どんな馬に乗っていたの」

「金の鈴を付けた草の馬だったよ」

お父さんはさらりと言った。

「……………」

「イルには今、見えているんだろう？ 羨ましいなあ、お父さんは大人になったら見えなくなってしまった。命を助けて貰ったというのに」

「命を…」

「ああ、お父さんと妹はね、一生懸命逃げたけれど、兵隊に追いつかれてしまった。戦は人間の心をねじ曲げてしまふ。抵抗

出来ない小さな子供すら許せないほどに」

お父さんの声が少し震えた。一生消えない恐怖の記憶なんだ。「怖い顔の兵隊が、大きな刀を振り上げて、ああ、もう駄目だ！ っと思った時、…信じられるかい？ ああ、イルなら信じてくれるね。空から草の馬がたくさん駆け降りてきて、兵隊を追い払って、お父さん達を乗せた馬を、空を飛ぶように走らせて逃がしてくれたんだ」

お父さんが少し興奮して早口になる。

「空を飛ぶように?!」

「ああ、凄かったぞ」

「それで?!」

「そこまでぞ。今のお祖父さんお祖母さんのパオの前に、お父さん達を置いて、みんないなくなってしまうた」

「……………」

イルは驚きの連続だったが、幻のように見ていた草の馬を、お父さんも知っていたのが嬉しかった。しかも命の恩人だったなんて！

「それから、お父さんと妹はその家族に入れて貰って、まあ、幸せに暮らしたんだ。そして、大人になって、その家族の子供



の一人と結婚して、子供が出来て」

「お兄ちゃん達が生まれたのね」

イルはまだドキドキしてきた。でも、さっき程、怖くない。

「ある夜、不思議な風が吹いたんだ。懐かしいような、子供の頃だけ感じた夏草の匂いのような」

お父さんはまたイルの肩を抱き寄せた。

「それでね、お父さんは、小さい時のあの友達が訪ねて来てくれたって何故か確信して、外に出たんだ。そしたらね、……

………イルがいたんだ」

お父さんの手に力が入った。

「小さい赤ん坊のイルが」

「私も、どこかで助けられて運ばれて来たの？」

「うん？ その頃には戦も収まっていたからね。ここから先はお父さんが思うだけなんだけれどね。…イルは、あの、草の馬に乗るヒト達の子供じゃないかなあ」

「ええっ?!」

さすがに話が飛びすぎて、イルはびっくりな声をあげた。

「だからね、イルは何らかの事情で、…そう、人間の所で育てられた方が幸せになれるって判断された子供なんだよ。そして、

友達だったお父さんに預けに来たんだ。嬉しかったよ。お父さんの事を覚えていて、大切なイルを預けに来てくれた」

イルは聡い子供だった。そこまで聞いて、お父さんの話は作りの事で、イルが本当の子供じゃないって事実を甘い飴掛けにくるんで、悲しみを和らげようとしてるのかも…と思った。

お父さんはイルの表情を見て取った。

「お父さんが思っているだけだからね。でも、イルは自分ですう思う事はないかい？」

イルは思い巡らせた。足が凄く早い事、走っても走ってもちっとも疲れない事、時々、馬が何を言っているのか分かる事、木や風の声が聞こえる事……。おかしな子って思われたくないから黙っていた事はかりだ。

でも、あの草の馬のヒト達の仲間？ なら、それは気のせいでも、イルがおかしな子だからでもなかったの？

大地にこぼれるような感覚だ。新しい世界が目の前に広がった気がする。

お父さんの話が作り話でもいい。自分は信じよう。こんなにもイルを分かってくれて、愛してくれてお父さんの話……。例えば、嘘だとしても、自分の中では真実に違いはない。

「でも、今はまだお父さんお母さんの子供でいてくれるかい？」

お母さんは子供の頃、お父さんの話を信じてくれた数少ない一人なんだよ」

イルはうなずいた。

「それとねえ、お兄ちゃんを許してあげておくれ。部落の中で一番馬に乗るのが上手なイルが羨ましいんだよ。もう既に、上のお兄ちゃんお姉ちゃんに、こつり絞られたから」

もとより、イルはお兄ちゃんへの恨み事など消えていた。お陰でこんな素敵な秘密を聞けたんだもの。

そして、お父さんの前に乗って、二人でボクボクと家路にいった。

くおしまい